

【特集論文】

**幼稚園教育要領における領域「環境」
—研究動向を中心として—**

雲財 寛（日本体育大学）

本稿の目的は、幼稚園教育要領における領域「環境」に関する研究の動向を把握し、新しい幼稚園教育要領に対する示唆を導出することである。この目的を達成するために、まず、これまでの幼稚園教育要領の変遷と、新しい幼稚園教育要領の改訂の要点を整理した。次に、幼児教育の「環境」に関する研究の動向を整理した。そして、新幼稚園教育要領で追加された2つの内容に対する示唆を導出した。具体的には、国際社会とのつながりを促すためには、身近な環境に日本語以外の言語を話すことができる幼児とともに学ぶことなどを指摘した。そして、比較する力の基礎を育成するためには、比較の基準や比較対象を意識させる声かけが有効であることを指摘した。また、関連付ける力の基礎を育成するためには、「何が」「どのように」といった視点から考えさせる声かけが有効であることを指摘した。

キーワード：幼児教育，幼稚園教育要領，環境，動向

Content “Environment” in Course of Study for Kindergarten —Focusing on the Research Trends—

Hiroshi UNZAI (Nippon Sport Science University)

The purpose of this paper is to review the research trends about environment about the course of study for kindergarten and to make a suggestion for new the course of study for kindergarten. The author analyzed the historical change of the content “environment” on the course of study for kindergarten. A new content “environment” on the course of study for kindergarten added two contents (connection of local and international community, thinking of comparison/ relating). For promoting connection of local and international community, it is important to learn with young children who can speak languages other than Japanese in a familiar environment. For developing think of comparison, teacher indicates a standard of comparison and target of comparison. For developing think of relating, teacher indicates a view point about “What” or “how”.

Key Words: kindergarten, course of study, environment, review

はじめに

本稿では、幼稚園教育要領における領域「環境」に関する研究の動向を把握し、新しい幼稚園教育要領の課題に対する示唆を導出する。

このために、まず、幼稚園教育要領における領域「環境」のこれまでの変遷を整理する。次に、新しい幼稚園教育要領の改訂の要点を整理する。そして、幼児教育の「環境」に関する研究の動向について整理し、新幼稚園教育要領の課題に対する示唆を導出する。

1. 幼稚園教育要領における領域「環境」

まず、これまでの幼稚園教育要領の変遷を分析し、何が重視され、何が変わっていったのかを確認する。幼稚園教育要領における教育内容の領域の区分は、1964年（昭和39年）の幼稚園教育要領まで、「健康」、「社会」、「自然」、「言語」、「音楽リズム」、「絵画制作」の6領域であったが、1989年（平成元年）の改訂で「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域となった（大坪, 2005）。したがって、本稿では、まず、1989年（平成元年）版から2008年（平成20年）版にかけて領域「環境」に関する記述の変遷を確認する。なお、2017年（平成29年）版については、次章で詳細を述べる。

1.1 1989年（平成元年）版

1989年（平成元年）版の領域「環境」は、1964年（昭和39年）版の領域「社会」・「自然」をもとに作られた（大坪, 2005）。1989年（平成元年）版の幼稚園教育要領の領域「環境」については、以下のように書かれている（文部科学省, 1989）。

環境
 [この領域は、自然や社会の事象などの身近な環境に積極的にかかわる力を育て、生活に取り入れていこうとする態度を養う観点から示したものである。]

1 ねらい
 (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。
 (2) 身近な環境に自分からかかわり、それを生活に取

り入れ大切にしようとする。

(3) 身近な事象を見たり考えたり扱ったりする中で、物の性質や数量などに対する感覚を豊かにする。

2 内容
 (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
 (2) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
 (3) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
 (4) 身近な動植物に親しみをもって接し、いたわったり大切にしたりする。
 (5) 身近な物を大切にする。
 (6) 身近な物を使って考えたり試したりするなどして遊ぶ。
 (7) 遊具や用具の仕組みに関心をもつ。
 (8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
 (9) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。
 (10) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

3 留意事項
 上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

(1) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にしたい気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。
 (2) 数量などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量などに関する興味や関心、感覚が無理なく養われるようにすること。

1989年（平成元年）版の領域「環境」では、身近な環境に積極的にかかわる力を育て、生活に取り入れていこうとする態度を養うことを主眼としている。このように、まず、領域「環境」がどのような位置づけなのかを示す記載があり、その後、ねらい、内容、留意事項が記載されている。この構成は現在まで続いている。この元年版からねら

い、内容、内容の取り扱いがどのような変遷をたどったのかを確認していく。

1.2 1998年（平成10年）版

1998年（平成10年）版では以下のように書かれている（文部科学省，1998）。

<p>環境 周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。</p> <p>1 ねらい</p> <p>(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。</p> <p>(2) 身近な環境に自分からかかわり、<u>発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。</u></p> <p>(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。</p> <p>2 内容</p> <p>(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。</p> <p>(2) <u>生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。</u></p> <p>(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。</p> <p>(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。</p> <p>(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。</p> <p>(6) 身近な物を大切にする。</p> <p>(7) <u>身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。</u></p> <p>(8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。</p> <p>(9) <u>日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。</u></p> <p>(10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。</p> <p>(11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。</p> <p>3 内容の取扱い 上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。</p>	<p>(1) <u>幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気づき、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。</u></p> <p>(2) <u>幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。</u></p> <p>(3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。</p> <p>(4) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。</p>
---	--

※下線は筆者。1989年（平成元年）版との加筆点を下線で示した。

このように、1998年（平成10年）版では1989年（平成元年）版と比べて大幅な改訂はないものの、いくつか加筆されている事項がある。これらの加筆点で特徴的なのは、内容の取扱い(1)と(2)である。(1)では、「(1)幼児が、(中略)自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること」とある。ねらいにも、「(2)身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。」と加筆されていることから、特に環境と関わる過程を重視していることがわかる。

また、内容の取扱い(2)では、「(2)幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、(後略)」とあるように、体験を重視している領域内容であるといえる。

1.3 2008年（平成20年）版

2008年（平成20年）版の幼稚園教育要領の領域「環境」では、以下のように書かれている（文

部科学省，2008)。

<p>環境 周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。</p> <p>1 ねらい</p> <p>(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。</p> <p>(2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。</p> <p>(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。</p> <p>2 内容</p> <p>(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。</p> <p>(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。</p> <p>(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。</p> <p>(4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。</p> <p>(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。</p> <p>(6) 身近な物を大切にする。</p> <p>(7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。</p> <p>(8) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。</p> <p>(9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。</p> <p>(10) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。</p> <p>(11) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。</p> <p>3 内容の取扱い</p> <p>上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。</p> <p>(1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。特に、<u>他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自</u></p>

ら考えようとする気持ちが育つようにすること。

- (2) 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。
- (3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にす気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。
- (4) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

※下線は筆者。1998年(平成10年)版との加筆点を下線で示した。

大きな変更はないものの、下線で示したように、2008年(平成20年)版では、内容の取扱いの(1)「特に、他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自ら考えようとする気持ちが育つようにすること。」について加筆されている。まず、「新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい」や「自ら考えようとする気持ちが育つように」とあることから、考えることに対する肯定的な態度を重要視していることが読み取れる。また、「他の幼児の考えなどに触れ」とあることから、他者との学びも重要視していることが読み取れる。

1.4 まとめ

以上、幼稚園教育要領の領域「環境」の変遷を確認してきた。このように記述の変遷を確認すると、多少の加筆はあったものの、ねらいの(1)、(2)、(3)についてはほぼ変わっていないようである。また、時代を経てより広義な意味で「環境」を捉えていることが示唆された。

2. 2017年（平成29年）版の幼稚園教育要領の要点と領域「環境」

上述してきたような変遷を経て、2017年（平成29年）版の幼稚園教育要領はどのように変わったのであろうか。2017年（平成29年）版の幼稚園教育要領では、育成を目指す資質・能力が明確化され、さらに、小学校教育との円滑な接続という観点から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。これを踏まえ、ねらい、内容、内容の取扱いの関連については、次の表1に示すように整理されている。

表1 ねらい、内容、内容の取扱いの関連（文部科学省、2017、p.11より筆者作成）

ねらい	幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたもの
内容	ねらいを達成するために指導する事項
内容の取扱い	幼児の発達を踏まえた指導を行うに当たって留意すべき事項

また、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿については、「ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿であることを踏まえ、指導を行う際に考慮するもの」（文部科学省、2017、p.11）とされる。そして、領域「環境」においては、以下のように書かれている（文部科学省、2017）。

<p>環境 〔周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。〕</p> <p>1 ねらい (1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。 (2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。 (3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。</p>

<p>2 内容 (1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。 (2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。 (3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。 (4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。 (5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。 (6) <u>日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。</u> (7) 身近な物を大切にすること。 (8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、<u>自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。</u> (9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。 (10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。 (11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。 (12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。</p> <p>3 内容の取扱い 上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。 (1) 幼児が、遊びの中で周囲の環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心を持ち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、<u>自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。</u> (2) 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。 (3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分から関わろうとする意欲を育てるとともに、様々な関わり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にしたい気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。</p>

(4) 文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。

(5) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

※下線は筆者。2008年（平成20年）版との加筆点を下線で示した。

下線で示したように、2017年（平成29年）版では、内容(6)「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。」と、その内容に関する取扱い(4)「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること。」が加筆された。これに関して、幼稚園教育要領解説では、以下のように書かれている（文部科学省、2017, pp.7-8）。

日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむことなどを「内容」に新たに示した。また、文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすることなどを「内容の取扱い」に新たに示した。

このように、活動の内容としては、伝統的な行事や遊び、異なる文化に触れることなどが示されている。

また、そのほかの加筆点として、内容(8)「身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比

べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。」とあり、内容の取扱い(1)「幼児が、(中略)自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。」とあるように、思考力に関する内容が示されている。このことから、思考力の基礎の具体として、比較する力や関連付ける力の基礎の育成も重要視されていることがわかる。

3 幼児教育の領域「環境」に関する研究の動向

以上、領域「環境」に関する幼稚園教育要領の変遷と、新しい幼稚園教育要領の要点について整理してきた。次に、領域「環境」について、これまでどのような研究が行われてきたのか、その動向を整理する。CiNiiを用いて、「環境」「自然」などをキーワードとして、「保育学研究」、「乳幼児教育学研究」その他乳幼児教育に関する大学紀要や論文集を中心に検索した。検索日は、2019年6月11日である。また、幅広い年代の研究に対応するため、出版年は特に限定しなかった。

概観した結果、目的・目標に関する研究、教材に関する研究、幼児の実態に関する研究の3つのカテゴリーに大別することができた。以下、その詳細について述べる。

3.1 目的・目標に関する研究

目的・目標に関する研究は、幼稚園教育要領の歴史の変遷を分析した研究が多い（坂田・立元、1999；藤岡、2011；姜、2012；八幡、2017；大坪、2018；天野、2019）。たとえば、姜（2012）は、幼稚園教育要領における領域「環境」の内容を分析し、その教育内容の特質と変化の過程を明らかにしている。分析の結果、1989年の領域「環境」を「幼児の発達のために必要な社会的、自然的環境とはなにかを問い直していく領域（p.90）」、1998年の領域「環境」を、「社会や自然の事象などの身近な環境に積極的にかかわろうとする力を里館、生活に取り入れていこうとする態度を養うための領域（p.90）」という特質を見出している。

また、大坪（2018）も同様に、幼稚園教育要領

の領域「環境」の捉え方の変遷を分析しており、これまでの幼稚園教育要領のほか、2017年（平成29年）度告示の幼稚園教育要領についても分析している。その結果、2017年（平成29年）度告示の幼稚園教育要領では、これまで以上に具体的な記述となっていること、子供に対して保育者がどのような働きかけをしていけばよいのか、そのヒントが潜んでいることを指摘している。

以上のように、目的・目標に関する研究では、主に幼稚園教育要領の変遷を分析し、その特徴を導出する研究が多くみられる。

3.2 内容・方法に関する研究

内容・方法に関する研究は、主に「教材に着目した研究」と「指導法に着目した研究」に分類できる。以下、それぞれの研究を例示しながら述べていく。

3.2.1 教材に着目した研究

教材に着目した研究として、たとえば、箕輪（2006）は、幼児同士が関わる遊びとして、「砂遊び」を取り上げ、その特徴を分析している。分析の結果、砂の変化が次のテーマや行為を導く砂遊びは、イメージを伝え合うことが主になる遊びをすることが難しい子ども同士や、仲間関係が十分に形成されていない子ども同士が、遊べるようになるための入り口となる可能性があることを明らかにしている。このほか、メダカの飼育に関する教育的価値を考察した丸山・松澤・今村（2002）や、稲作に関する教育的価値を考察した亀山（2012）など、特定の教材の教育的意義について考察した研究もみられる。

3.2.2 指導法に着目した研究

指導法に着目した研究としては、たとえば、小川・原田・中澤（2017）は、虫飼育活動に熟達した保育者の実践を分析し、幼児に対する質の高い働きかけについて調査した。その結果、保育者の「虫に対する感情の表現」や「虫の扱い方」の言葉かけが、幼児の虫や仲間との交流を促したり、保育者の「虫の知識」の言葉かけが幼児の虫への興味と虫の知識の獲得を促したりしていることを

明らかにしている。また、南・中山（2018）は、平成29年度の幼稚園教育要領に対応した授業の具体例を複数例示している。

以上のように、内容・方法に着目した研究では、それぞれの教材の特徴について考察したり、それらの教材によりどのような指導が可能であるかを論じたりしている研究がみられる。

3.3 幼児の実態に関する研究

幼児の実態に関する研究としては、たとえば、棚橋（1998）は、幼児の自発的質問を、種類別・年齢別にまとめて、領域「環境」の指導の視点から分析・考察を行っている。その結果、アニミズム的な質問、名前は、ナニ、ドコという質問、何故、どうして、いつ、という質問、生長過程、全体、特徴、構造、機能、比較、因果関係、しくみに関する質問などがみられたこと、思考の発達とともに内容が深くなっていることを明らかにしている。

また、香曾我部（2007）は、養蚕における幼児の対応の変容の分析から、幼児がどのように生き物とかわり、どのような概念を再構成しているのか、そのプロセスを明らかにしている。具体的には、生き物への対応の決定プロセスが、「生き物との相互作用」→「生き物の外的な変化」→「幼児の知的好奇心の増大」→「概念的な葛藤」→「幼児の推論、知識の受容」→「生き物の特性の把握」→「既存のカテゴリーに紹介」→「生き物の概念を組織化」→「生き物への対応を決定」であることを明らかにしている。

このように、幼児の実態に関する研究では、幼児の発話や行動から思考や行動過程を明らかにしている。

4 新幼稚園教育要領に対する示唆

以上、これまでの幼稚園教育要領の変遷と、領域「環境」に関する研究の動向を確認してきた。それでは、2017年（平成29年）版の幼稚園教育要領を踏まえるならば、今後どのような研究が求められるだろうか。ここで、前述の2017年（平

成 29 年) 版で新しく追加された内容を振り返ってみると、次の 2 点があった。第一に、2017 年(平成 29 年) 版の幼稚園教育要領解説においても示されていたように、内容(6)「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。」である。第二に、思考力の基礎の具体として、比較する力および関係付ける力の基礎の育成である。以下に、追加された内容に分けてそれぞれ述べていく。

4.1 内容(6)について

領域「環境」という視点から、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えに着目した研究はあまりみられないものの、援用可能な研究としては、たとえば、黒澤(2018, p.92)では、外国人幼児を含む学級の幼児が、異文化である外国の言葉に興味を示し、自分たちの生活に取り込むようになることは、幼児の国際理解を培う土壌づくりになる可能性を指摘している。つまり、身近な環境に日本語以外の言語を話すことができる幼児とともに学ぶような活動(たとえば、外国の言葉や文化を教えてもらうなど)によって、国際理解の意識の芽生えが養われる可能性がある。

4.2 比較する力や関連付ける力の基礎の育成について

比較する力・関係付ける力の育成については、前述の棚橋(1998)が重要な知見となろう。棚橋(1998, p.22)は、自発的質問の分析から、3歳児は安定した環境で探索を十分にし、4歳児はいろいろな活動をして知的好奇心を刺激し、5歳児は遊びを充実させて科学する心を育てることが重要であることと述べている。他方、比較する力の育成には、違いがある事象を提示することと、比較の基準を明確にすることが重要であり、関連付ける力の育成には、「何が」や「どのように」といった視点から、知識を関連付けることが重要である(角屋, 2019, pp.18-19)。これらの知見を合わせると、遊びや生活の中で下記のようなアプローチが有効であると考えられる。

まず、幼児が生活する環境では、知的好奇心を刺激し、かつ、違いを見つけやすいもの(色、材質、大きさが異なる小石、花びらの色や大きさが異なる植物)などを意図的に配置しておくことで、自発的な質問を促すことができよう。また、自発的な質問に対し「何をもとにしたのかな」(基準を意識する声かけ)や「何と何を比べたのかな」(比較対象を意識する声かけ)といった声かけを行うことで、比較することを促すことができると考える。また、「何がそうさせているのかな」や「どのようになっているのかな」といった声かけを行うことで、関連付けることを促すことができると考える。

さらに、内容の取扱い(1)「幼児が、(中略)自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。」とあるため、このような気持ちが育つような声かけが重要である。たとえば、「うまく説明できたね」や、「くわしくお話できるようになったね」などの声かけが有効であると考えられる。

5. まとめ

本稿の目的は、幼稚園教育要領における領域「環境」に関する研究の動向を把握し、新しい幼稚園教育要領に対する示唆を導出することであった。この目的を達成するために、まず、これまでの幼稚園教育要領の変遷と、新しい幼稚園教育要領の改訂の要点を整理した。次に、幼児教育の「環境」に関する研究の動向を整理した。そして、新幼稚園教育要領で追加された 2 つの内容に対する示唆を導出した。具体的には、国際社会とのつながりを促すためには、身近な環境に日本語以外の言語を話すことができる幼児とともに学ぶことなどを指摘した。そして、比較する力の基礎を育成するためには、比較の基準や比較対象を意識させる声かけが有効であることを指摘した。また、関連付ける力の基礎を育成するためには、「何が」「どのように」といった視点から考えさせる声かけが有効であることを指摘した。

最後に、領域「環境」の取扱いに関する留意点

を述べる。大坪 (2018) によれば, 平成 29 年版の幼稚園教育要領は, 「保育は総合的に行うもの」であることを強調した改訂であるという。この指摘を踏まえるならば, 新しく追加された内容だけに限らず, 領域「環境」のねらいや, 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見据え, 総合的に指導していくことが重要だと考える。

引用文献

- 天野佐知子 (2019) 「幼稚園教育要領の変遷に関する一考察 —小学校家庭科を見据えた保育内容「自然」及び「環境」—」『金沢星稜大学人間科学研究』2, 9-14.
- 藤岡秀樹 (2011) 「幼稚園教育要領の領域「環境」についての研究 —教育要領の変遷と評価に焦点を当てて—」『京都教育大学環境教育研究年報』19, 1-11.
- 角屋重樹 (2019) 『なぜ、理科を教えるのか 理科教育がわかる教科書 改訂版』文溪堂.
- 亀山秀郎 (2012) 「幼稚園における稲作の意義の検討」『保育学研究』50(3), 276-286.
- 黒澤聡子 (2018) 「幼児期における国際理解の基盤を培う教育の在り方に関する調査研究 —外国籍等の幼児が在園する幼稚園の教育上の課題と成果から—」『初等教育資料』963, 86-93.
- 姜華 (2012) 「幼稚園教育要領における教育内容の変化に関する一考察 —領域「環境」の内容分析を中心に—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』20, 81-91.
- 丸山良平・松澤久美子・今村しげ子 (2002) 「幼稚園において野性のメダカを飼育する意義について」『保育学研究』40(2), 252-259.
- 南正信・中山千章 (2018) 「保育科学生の保育実践力を養う教材研究 (環境指導法) —保育所保育指針, 幼稚園教育要領, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領における「環境」のねらいと内容および内容の取扱いに着目した授業展開の方法と課題—」『つくば国際短期大学 紀要』44, 11-19.
- 箕輪潤子 (2006) 「幼児同士の砂遊びの特徴」『保育学研究』44(2), 178-188.
- 文部科学省 (1989) 「幼稚園教育要領 (平成元年 3月) 第 2 章 ねらい及び内容」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/old-cs/1322229.htm) (2019年 8月 30日 閲覧)
- 文部科学省 (1998) 「幼稚園教育要領 (平成 10年 12月)」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1319940.htm) (2019年 8月 30日 閲覧)
- 文部科学省 (2008) 「幼稚園教育要領 (平成 20年 3月)」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/you.pdf) (2019年 8月 30日 閲覧)
- 文部科学省 (2017) 「幼稚園教育要領 (平成 29年 3月)」(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiel_dfile/2018/04/24/1384661_3_2.pdf) (2019年 8月 30日 閲覧)
- 小川翔大・原田理恵・中澤潤 (2017) 「虫飼育活動における熟達した保育者の働きかけ —幼児への言葉かけの内容に着目して—」『保育学研究』55(2), 177-188.
- 大坪祥子 (2018) 「幼稚園教育要領の領域「環境」の捉え方の変遷」『宮崎学園短期大学紀要』10, 25-33.
- 坂田和子・立元真 (1999) 「平成 10 年度公示の幼稚園教育要領の分析と課題(3) —領域「環境」・「言葉」・「表現」を中心に—」『宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学』1, 143-154.
- 棚橋治美 (1998) 「身近な自然環境に関する幼児の自発的質問の研究 —保育内容「環境」の指導・援助の方法の視点から—」『乳幼児教育学研究』(7), 15-24.
- 八幡眞由美 (2017) 「幼稚園教育要領における領域「環境」の変遷に関する考察 I —幼稚園創設期の保育内容から現行の幼稚園教育要領までの変遷を中心に—」『新島学園短期大学子ども学理論集』1, 59-71.